越谷の蔵を活かした住文化の継承
―住まい・まち学習の実践と課題―

佐々木　唯*

Creating and Passing on Home Culture through Use of a Warehouse in Koshigaya: Teaching the Concepts of Home and Community and Issues with That Instruction

Yui SASAKI

要旨　住まいとまちの歴史的背景及び地域に固有の生活文化を理解することは児童・生徒の学びに多様な可能性を有し，地域文化を次世代へ継承するために重要である．地域資源の活用・伝統文化の理解に資する効果的課題を抽出し，越谷市に現存する蔵を教材とした住教育の展開を検証した．地域の住まい・まち学習として，越谷が経験した自然災害の歴史をたどり，大火に耐えた蔵とその防火建築の有用性が確認できた．蔵の現代的役割は，地域・教育資源として活用する取り組み，及び地域連携に資する実践的活動を通して，住生活をいっそう豊かにする可能性である．地域協働による住教育の推進に向けて，地域・教育資源を取り入れた住生活の実践的・体験的な学習活動の展開が望まれる．

キーワード：防災教育　地域資源　住生活　住教育　家庭科教育

１．緒言

日本の住まいは木造であるため火災に弱く，防火や収納・保管を目的として蔵が設けられてきた．蔵のまちとして知られる川越は城下町として栄え，寛永の大火後に現街区の基が築かれ，続く1893（明治26）年の大火を機に商家が防火対策を推進して蔵造りの町並みを形成した．都市火災の多くは人災であり，地震後に発生した火災によって多数の人命が奪われてきた．自然災害の発生頻度が増大する状況，防災施設の老朽化，人口高齢化において，大災害の教訓に学ぶことは住教育に資する可能性を有している．

蔵は日本の気候風土に適した建築であり，土蔵は厚壁の土壁が内部の湿度を一定に保つことから，夏は涼しく冬は暖かく室温を調節することができる．災害に備えた住まいと地域をつくる知恵として，蔵のあるまち[1)]が全国各地に展開され，越谷市にも旧日光街道沿いに蔵が現存する．越谷の災害の歴史をふまえ，住生活に大きな損失を与える自然災害や耐火・防災に着目し，蔵造りの建築が広まる背景及び防災・減災の取り組みを検証する重要性は高い．

本研究の目的は自然災害に備える住宅について，防災対策としての蔵に着目し，日本の暮らし・住み方としての住文化を再評価することにある．蔵を活用した住環境・住生活について考察することによって，住教育の視点から地域の住まい・まち学習の展開を検討する．

２．研究方法

２－１　調査地の概要

越谷市は旧日光街道の宿場町[2)]として知られ，

* ささき　ゆい　文教大学教育学部非常勤講師

徳川家康の訪れた鷹狩り場としての歴史があり，そのための御殿が造成された地である．越ヶ谷御殿は，明暦の江戸大火によって江戸城が焼失した後，二ノ丸御殿に移築されたため往時の姿はないが，御殿跡は御殿町として名を残している．

また，水郷越谷と知られるように，越谷市には中川，古利根川，新方川，元荒川，綾瀬川の５本の河川が流れる．元荒川は，1629（寛永６）年に入間川筋を本流とする瀬替によって，熊谷以南の荒川を指す．全長173kmの一級河川荒川[3)]は，これまで２回人工的に川筋が替えられ，1911（明治44）年に始まる荒川放水路事業によって開削された．古利根川は，1594（文禄３）年に伊奈忠次が利根川を太日川（江戸川筋）に付替え，鷲宮以南の廃川を指す．

江戸時代に始まる治水事業の功を奏し，越ヶ谷宿は宿場町として栄え，度重なる洪水・噴火・地震による自然災害，及び大火から復興した歴史的居住地である．

２－２　研究方法

まず，住生活として取り組むべき防災教育の課題及び地域資源の活用を探るため，地域の災害史を明らかにする．頻発する自然災害に備えるため，地域の課題として復旧・復興を成した災害に着目し，文献及び聴き取り調査（2018年）を実施した．

次に，住生活の一環として日常の防災対策に関する学生の意識を把握するため，住まい・まち学習に関わる質問紙調査を行った（調査時期：2019年10月）．調査項目は表１に示す．

表1　調査項目―住まい・まち学習2019―

１．高校までの住まい学習，教科書
２．空間理解（絵本，遊びの記憶）
３．住まい・まち学習（フィールド・候補地）
４．防災対策（住宅・家族・地域）
５．住まいの知識（構成，和室数，洋室数）
６．和室での生活・暮らし（好き・嫌い，その理由）
７．暮らしの中の和（和を感じるインテリア要素）
８．自由記述

３．日光街道と越ヶ谷宿―地域災害学習として―

３－１　越谷の災害史―自然災害の教訓―

風水害による自然災害に備えることは，住生活の重要な取り組みである．そこで，地域に特有の災害に関する歴史に着目し，文献及び聴き取り調査の結果を年表にまとめた（表２）．

越谷地域は，1602（慶長7）年四丁野村の一部に越ヶ谷宿が取立てられたことを契機に，江戸と奥州を結ぶ海道となった．かつての武蔵国は東山道より東海道に編入され，奥州海道，甲州海道のように「海道」と称された．1617（元和３）年に徳川家康廟を日光山へ改葬した以降は，奥州海道の千住から宇都宮を日光街道と称した．越ヶ谷宿に甚大な被害を与えた水害は，関東洪水として４回を数える（表２）．日本は，太平洋の北西端に位置する島国であり，アジア熱帯季節風気候のため，夏季の梅雨，夏季から秋季に南方海上に発生する台風によって，強風と大雨が多発する地理にある．国土の約７割が山岳地帯であり，平野部は低平な沖積平野のため，過去の大洪水により山岳地帯から運ばれてきた土砂の堆積で形成されている．洪水・土砂災害や高潮災害のみならず，台風や冬季の季節風による強風が海難事故や大火災害をもたらした[4)]．

表２　越ヶ谷の災害―風水害・大火―

慶長７	（1602）年	奥州海道・公道指定
慶長９	（1604）年	徳川家康が越ヶ谷御殿を造成
寛永６	（1629）年	荒川が入間川筋に瀬替
明暦３	（1657）年	江戸大火
宝永元	（1704）年	関東洪水
宝永３	（1706）年	富士山大噴火，越谷に灰が降り不作
寛保２	（1742）年	関東洪水
天明３	（1783）年	大沢町大火，浅間山噴火
天明６	（1786）年	関東洪水
文化13	（1816）年	大沢町大火
安政元	（1854）年	江戸大地震
明治７	（1874）年	越ヶ谷町大火
明治32	（1899）年	越ヶ谷町大火
明治43	（1910）年	関東洪水
大正12	（1923）年	関東大震災，郡制廃止

先述したように，1657（明暦３）年の江戸大火では越ヶ谷御殿が江戸城に移築され，越ヶ谷は宿場町として発展したところ，1783（天明３）年以降に大沢町の大火が２回，越ヶ谷町の大火が1874（明治７）年と1899（明治32）年にあった．大沢町大火の1783（天明３）年には，浅間山噴火のため越谷に降灰があり大凶作となった．越ヶ谷町の大火は郷土の歴史学習において伝承されている[5]．

３－２　越谷の蔵―大火の教訓―

越谷に現存する蔵の多くは土蔵であり，二度にわたる大火の教訓として建設された．蔵の規模は２間（3640mm）×３間（5460mm）が主流といわれ，壁に土を約300mm塗り重ねる．木組みを覆って土を塗り固めるため，防火性に優れる．

なお，土蔵の基礎は堅牢であり，土の重量に耐える柱や梁を組み，土を塗り乾かすことを繰り返すため，完成までに２～３年をかける．

外観の仕上げ方によって，全体に漆喰を塗り込める塗家，石張りの蔵がある．仕上げの種類は，新建築資材の採用によって，レンガ，大谷石，御影石を用いた蔵，腰巻に人造石洗出仕上げの漆喰塗，黒漆喰仕上げの蔵板張り，なまこ壁[6]の蔵がある．工法の特徴は左官が仕上げる点にあり，漆喰を用いた意匠には全国の地域性がみられる．

３－３　防火対策

うだつのレンガ塀（写真１）は，類焼防止として設置された防火対策である．耐火性に優れたレンガは，近代に普及した材料であり，重厚な土蔵造りの二階建てを補強する．レンガ塀のうだつは越谷にはめずらしく，レンガ製造最大手の日本煉瓦製造工場（深谷市）近郊の熊谷には多く現存する．後述のように，江戸時代から十代続く旧家（小泉家）の二階建て土蔵（明治８年築）は，明治32年の大火に耐えた防火建築である．

写真１　明治８年の土蔵―レンガ塀付―

写真２　土蔵―観音開きの窓―

写真３　土蔵の室礼―重陽の節句2019―

４．住まい・まち学習―地域・教育資源―

文教大学教育学部の学生（住居学受講生）を対象として，住まい・まち学習に関わる質問紙調査を行った[7]．調査内容は，高校までの学習と知識，「地域資源の活用」である（表１）．

４－１　地域に対する理解―越谷を事例にして―

越谷は「ねぎ」「慈姑」の特産品ほか，「だるま」「ひな人形」「甲冑」「籠染め」を製造する職人の街でもある．その背景として，日光東照宮の造営を担った職人が越ヶ谷に移り住み，工芸品を生産・販売した歴史がある．

越谷の特産品や名所について学生に質問すると，「ねぎ」「だるま」[8]は一定知られるが（表３），その歴史，蔵のある旧越ヶ谷宿として十分伝わっていない現状にあった（表７）．

４－２　高校までの住まい学習―家庭科において―

高校での使用教科書は，「東京書籍」が多く，「教育図書」による学習が主流である．学習内容は「１．住まいとは」が主にあり（表４），住教育は「７．災害と住まい」と「６．家庭内事故」により防災・減災教育を担う位置づけが再認識できる．日常・非日常に関わらず「生命・財産を守るシェルター」としての住まいと家庭の生活文化を継承する「住まいの役割」を評価し，防災・減災をふまえた「住まいの機能」を理解することは，安全な生活を身につける住教育につながる．

環境工学を基にする「３．通気と換気」「２．日光と採光」の学習，建築計画「５．LDK」の学習が回答された．一方，「４．室内環境汚染」や「８．インテリア」は回答数が少なく，衛生・管理や心理・意匠に関する現代的かつ最新の住教育が課題として指摘できる．

４－３　住まい学習―絵本・遊びにおいて―

住教育は，絵本や遊びの中にも見出され，学生の記憶をまとめた結果が表５と表６である．

住まい・まちに対する学生の認識を抽出し，地域教育資源（表７）の活用に関する新しい評価や認識を深める重要性が指摘できる．

表３　越谷の名産―農産品・工芸品―

１．ねぎ	４．だるま
２．慈姑	５．人形
３．いちご	６．陶芸品

自由記述，n=23

表４　住まいの学習2019

１．住まいとは	28（7/21）
２．日光と採光	12（1/11）
３．通気と換気	14（0/14）
４．室内環境汚染	9（0/9）
５．ＬＤＫ	13（2/11）
６．家庭内事故	16（1/15）
７．災害と住まい	19（0/19）
８．インテリア	1（0/1）

（単数回答／複数回答）

表５　住まいの絵本2019

三匹のこぶた，1933
ぐりとぐら，1967
こぐまちゃん，1971
11匹の猫とぶた，1976
ノンタン，1976-2019

その他：おしいれのぼうけん，100万かい生きた猫，バムとケロ，さかしま，そらまめ，てぶくろ，シンデレラ，かいけつゾロリ，ハウルの動く城，カールじいさんの空飛ぶ家

表６　子どもの時の遊び2019

人形・ぬいぐるみ遊び，着せ替え，手芸・小物づくり
リカちゃんハウス，シルバニアハウス，レゴ，積み木
ホイップル・こなぷん，アクアビーズ，粘土
風船バレー，バレー，ドッジボール，バドミントン
バスケット，サッカー
縄跳び，長縄，一輪車，トランポリン，家の柱登り
かるた，お手玉，折り紙，ぬり絵，お絵描き，写生
本読み，しりとり，パズル，カード交換，ピアノ
ＤＳ，ゲーム，カラオケ，映画，プラネタリウム
おままごと，お店屋さんごっこ，砂遊び，どろ団子
ブランコ，ジャングルジム，鉄棒，すべり台
かくれんぼ，鬼ごっこ・色鬼・ドロケイ，かけっこ
木登り，水切り，虫取り，セミとり，押し花
近所の神社，公園，アスレチック，秘密基地

表７　住まい・まち学習のフィールド2019

住まい	
埼玉県内	（川越，春日部，浦和）
埼玉県外	（千葉：船橋・幕張・流山，東京：浅草・上野） （群馬，京都，奈良，岡山）
まち	
歴史環境	（安中，京都，奈良，倉敷美観地区，真壁，佐原，横浜居留地，桐生，会津）
自然環境	（ムーミンパーク，こども動物自然公園，成田山，筑波山）
学習施設	（江戸東京たてもの園，江東区深川江戸資料館，博物館明治村，千葉県立房総のむら，新島襄邸，富岡製糸場，国立西洋美術館，埼玉県立近代美術館，埼玉会館，メディアパーク市川，笠原小学校，打瀬小学校，小・中・高等学校，大学）

表８　暮らしの中の和2019―和室数―

和室数	室名	
1（40）	寝室	(19)
	客間	（7）
	居間	（2）
	仏間	（1）
	―	(11)
2（8）	寝室＋寝室	（1）
	寝室＋客間	（1）
	―	（6）
3（2）	客間＋寝室＋寝室	（1）
	―	（1）
4（2）	寝室＋寝室＋寝室＋寝室	（1）
	寝室＋居間＋部屋＋部屋	（1）
8（1）	客間＋客間＋客間＋寝室 寝室＋寝室＋寝室＋部屋	（1）

凡例：（事例数）

５．地域教育資源による住まい・まち学習

防災教育に重きが置かれる住教育の現状をふまえ，蔵の防火建築，地域の災害の歴史を学ぶ展開が可能となる．そこで，保全・再生によって活用されている越ヶ谷の蔵について以下に述べる．

５－１　三連棟の蔵―国指定登録有形文化財指定―

木下半助商店は，かつての荒物屋であり，現役の商店である．「みせ」の奥に蔵が三棟並び建ち年代物の商品が納められている．明治の建築と蔵を保全・活用するため，旧日光街道越ヶ谷宿を考える会が発足し，商店は「越谷市有形建築登録文化財第一号」として登録された．登録文化財の一つである座敷は，越谷市民に地域資源としての商店・蔵及び登録文化財に対する理解を得る計らいとして，秋の文化財週間に一般公開が行われている．秋の越ヶ谷宿場まつりに主屋の座敷を公開し，来客に使う御道具が展示された（2017年）．住宅建築を越谷市民に公開する機会を設け，観光資源として公開前には庭の手入れをして整える．商店であるゆえ常時公開は営業に差し障り，蔵を舞台に撮影された地域発ドラマ（2018年）を通して，内部の詳細を知ることが可能である．建築所有者の日常生活に負担のないよう，例えば撮影協力によって登録文化財が認知されることは有効な方法である．

５－２　はかり屋の座敷蔵―複合施設として再生―

旧大野家住宅は秤の販売を営み，敷地奥にある二階建ての土蔵は座敷蔵の設えがあり母屋から廊下に沿って続く．内部には床が張られ，土蔵二階には観音開きの窓が設けられる（写真２）．主屋の座敷に使用される化粧材は高級材であり（棟梁：金子浅二郎），これは材木商の分家である故と推測される．床の間，仏間には銘木の紫檀，黒檀，鉄刀木（たがやさん）が用いられ，旧家の贅を尽くした往時の座敷文化をしのぶことができる．

旧大野家住宅は，地元住宅メーカーが土地を買い取り，建築は解体されることが決まっていたところ，地元のまちづくりを担う有志が保存を申し入れ，建物解体を免れた．蔵の性能や重厚感を活かした活用が熟慮され，店舗として改修を行い，越谷市有形建築登録文化財第二号となった．

これを実現したのは，まちづくりを行う会社の設立であり，一般社団法人越谷テロワールとして運営にあたり，賑わいの再生に取り組んでいる．運営に際して，最も困難であったことは「テナントを選定すること」という．主屋のみせ間には，和テイストのセレクトショップが入店し，落ち着いた店構えを街道にもたらしている．主屋のもと居間・座敷にフレンチレストラン，中の間に建築事務所，離れ二階にアロマサロン，蔵に飲食店，納屋に日替わりのテナントが入居する複合施設「はかり屋」となった．

５－３　油長の蔵―小学生の曳家体験―

「油長」の蔵は，地元住宅メーカーが蔵の保全・再生を決め，蔵を曳家工法によって移動させ宅地造成された．曳家とは，蔵をジャッキアップさせ鉄骨レール上に載せて動かす工法である．蔵の重量は100ｔ以上あるため，基礎を持ち上げ移動する伝統工法が採用された．越ヶ谷小学校の児童が課外授業として曳家体験をした（３年生120人）．

2015（平成27）年に蔵の補修工事が着手され，漆喰の塗り直し，内部の改修によって新しく生まれ変わった．蔵として新たな活用が検討されたのは，2013（平成25）年であり，越谷市は「越谷市景観計画」（2013年）を施行した．地域固有の歴史的資源を活かし，調和のとれた街並形成を図るため，「旧日光街道沿道特定地区」が制定された．住宅メーカーが再生した蔵は，越谷市との協議を重ねた結果，越谷市に寄付された．

越谷では桃の節句に「越谷ひな巡り」を催し，油長の蔵に雛人形が室礼（しつらい）される．蔵の元所有者が雛人形のほか，婚礼衣装・調度，祝膳，鼈甲製婚礼櫛飾，壁掛式押絵雛を飾り，訪問者を迎える．郷土の生活文化を伝える美しい室礼は，豊かな地域資源に恵まれた越谷の誇りとして公開されている．越谷に現存する蔵を保存活用してきた旧日光街道・越ヶ谷宿のひな巡りは７年目の開催になった（2019年）．

５－４　八百喜参ノ蔵―まちづくりの拠点―

越谷の旧家には，敷地内に稲荷社のある住まいが散見され，屋号「八百喜」の参ノ蔵は，稲荷社に並んで建つ．元は三棟連なり，大切に受け継がれてきた蔵の整理が行われ，現在は参ノ蔵が地域の拠点として定期的に公開されている．例えば，四季を通して，桃の節句，五月の節句，重陽の節句に蔵を設え訪問者を迎える．後の雛と越谷の菊によって，八百喜参ノ蔵には菊の室礼が飾られた（写真３）．雛人形を飾ったことのない学生と共に，大人の雛飾りを実習した（2018年）．菊は越谷市の花であり，菊農家による摘花の提供を受け，蔵の所有者と共に菊の香りを聴く，創造に富んだインテリアと住文化に立ち会うことができた．

５－５　レンガ塀付土蔵―明治大火を経験して―

レンガ塀付の蔵は，1875（明治８）年の建築である（棟梁：斉藤千〇郎）．明治32年の大火に耐えた土蔵であり，銅版張りの壁戸[9]は越谷を焼けつくした大火の経験が反映される（写真１）．店蔵は1899（明治32）年の建築（地元の宮大工，金子浅二郎），表の二重格子戸は美しい千本格子である．

みせの間にある大黒柱の背面には鉄製の敷居を備え，漆喰塗の防火戸を連ね防火対策が幾重にも施されている．

５－６　銅版張りの土蔵

土蔵の壁面が銅張になった蔵は，防火対策であることを述べた．その典型例として，遠藤家の蔵（明治20年前後竣工）は街道に面し，貴重な文化財的価値が高く，活用に向けた取り組みが急がれる．当家は，初代が白生地木綿問屋を営み，二代が小平衛を担う旧家であった[10]．

６　蔵を地域資源とした住教育

６－１　蔵の歴史―過去・現在・未来―

越谷には，街道沿いに蔵が多数現存していることが明らかになり，重厚な建築は歴史を語るまちなみのシンボルである．大火の教訓から建築された蔵は，維持管理に負担がかかるため倉庫としての現代的役割は失われつつある．地域の伝統文化を継承し，蔵のある歴史的建築を地域の交流拠点とした試みは，近隣に好評価されている状況が確かめられた[11]．新しい試みが受け入れられるには時間がかかる．持続可能な活用・再生のために，今後の展開が注目されている．

６－２　地域・教育資源と住文化―蔵に着目して―

蔵や庭のない住まいが多くなり，座敷離れの進む現代において，畳・板間，格子，縁側，土間からなる日本建築の空間を体験することは住教育の手段を広げる．旧家の地域・教育資源は，街かど博物館に相当し，郷土の地域資源を見出して誇りを持ち，旧日光街道の居住者による着実な活動が

重要な課題と考えられる．郷土の誇りとなる伝統的建築を地域の拠点や地域・教育資源として活用し，越谷の蔵とともに住生活・住文化の創出が強く期待される．

謝辞

本稿をまとめるにあたり，調査に快くご協力いただきました越谷新町商店会（井橋潤会長），旧日光街道越ヶ谷宿を考える会（畔上順平会長），八百喜参ノ蔵，越ヶ谷郷土研究会，新三石自治会（染谷隼生前会長）の皆様に感謝の意を表します．

注

1）文献１参照

埼玉県川越市の「蔵造りの町並み」，福島県喜多方市の「蔵のまち」，滋賀県長浜市の「黒壁」は，蔵のあるまちづくりを先導した成功例である．地方の商店街が衰退していく過程で，地域資源として土蔵や蔵造りの建物を特色として，地域住民や商店主が蔵を活用したのが始まりである．

川越は，明治期に埼玉県内有数の商業都市として発展した．蔵造りの町家は表に面して巨大な鬼瓦と箱棟を持つ切妻・平入・二階建の黒漆喰塗りの店蔵を構える．店蔵に並び袖蔵や煉瓦アーチ門を持つ大規模な蔵造り町家のほか，真壁造りや洋風外観の町家，登録有形文化財・あさひ銀行川越支店のような近代洋風建築がある．重伝建地区選定とともに，歴史的地区環境整備街路事業による街路整備が進められ現在に至る．

2）江戸から数えて３番目の宿場町として発展したのが越ヶ谷宿である．地名の詳細は下記の通り．越ヶ谷：1954年に２町８ヵ村（越ヶ谷町・大沢町・新方村・桜井村・大袋村・荻島村・出羽村・蒲生村・大相模村・増林村）の合併によって越谷町が成立し，合併前から存在する「越ヶ谷町」と区別するために「越谷町」となる．なお，旧日光街道沿いの「越谷市越ヶ谷」はそのまま地名を残し，「越ヶ谷」以外の地名「越谷」は，1954年越谷町成立以降に出来た地名である．

3）埼玉県秩父山地の甲武信ヶ岳は標高2,475mあり，その山麓東・奥秩父に荒川源流点がある．甲武信ヶ岳とは甲斐，武蔵，信濃にちなむ名称であり，富士川（吹笛川），信濃川（千曲川），荒川の源流，分水嶺がある．

4）文献２参照

防火強化策として，道路拡幅，延焼防止帯・広小路（ひろこうじ），火除地（ひよけち）の設置，塗屋（ぬりや），蛎殻葺（かきがら）の耐火建築が推奨された．さらに，避難対策として，橋を火災から守るための火除明地（ひよけあきち）を設け，植溜（うえだめ）（樹木の栽培場）が避難場所とされた．

5）越ヶ谷秋まつりの当番を準備する自治会会長に聴き取り調査を実施した（2016-2017年）．越ヶ谷秋まつりは，３年～４年ごとに行われる久伊豆神社の祭礼である．2016年10月は本町自治会が当番，2019年10月は新三石自治会が当番となり，会所を拠点に自治会組織と祭礼を担うコミュニティが受け継がれている．

6）なまこ壁は，壁面に平瓦を並べ，瓦の継ぎ目に漆喰を盛り付けて塗った仕上げ方をいう．

7）「住まいの学習」内容について，ほとんどの学生が住居領域の学習は「記憶がない」と回答したため，高校家庭科教科書の項目を示して複数回答によって質問した．調査対象者は文教大学教育学部家庭専修の専門科目「住居学」「住生活論」受講者である（調査時期：2015年４月，2016年10月，2017年10月，2018年10月，2019年10月）．文献３参照

8）越谷の伝統工芸として知名度のある「だるま」は1984年埼玉県伝統手工芸品に指定され，「越谷市だるま組合」７事業所が加盟する．「越谷ひな人形組合」（越谷甲冑を含む）19事業所，「越谷米菓組合」11事業所，「越谷桐箱組合」６事業所，「越谷桐たんす」１事業所が加盟．（出典：越谷市環境経済部産業支援課，越谷市商工会議所）．

9）文献4参照

江戸期から「塗師市（ぬしいち）」と称し，会席膳や椀物を商い，慶応年間（1596-1615年）に呉服，畳表，明治維新後は高級絹物を商った．袖蔵の床に木炭を敷いた簀子台を設え，湿気から絹物を守るため簀子台の上に反物を収めたという．

銅板張り壁戸（土戸）は，幅6尺（1818㎜）あり，2階には幅3尺の壁戸をはめこみ，店と住居を仕切っている．これは，明治32年の大火の経験による防火対策である．

明治35年発行『埼玉県営業便覧』に，塗師屋と記され，反物を商いとした．

10）文献4参照

11）地域にある伝統的建造物を有効に活用するためには，居住者の日常生活を大切にしながら，地域の文化を継承・発展して，越谷に固有のコミュニティを創造することに尽きる．

繰り返すが，住教育の視点を考慮し，和の建築・インテリアに関する新しい評価や認識を導くことの重みが指摘できる．

文献

1　日本民家再生協会編．よみがえる蔵，全国再生事例44選，丸善出版，2012

2　中央防災会議「災害教訓の継承に関する専門調査会」編，災害史に学ぶ風水害・火災編，2011

馬上和祥，河川・用排水路の変遷からみた「水郷こしがや」の地域形成に関する研究，建築学会学術講演梗概集，2012，pp.377-378

3　佐々木唯，伝統的建造物を活用した住まい・まち学習―住教育の実践と課題―，文教大学教育学部紀要第51集，2017，pp.173-179

佐々木唯，越谷の伝統工芸を活かした住文化の創造と継承：住まい・まち学習の実践と課題，文教大学教育学部紀要第52集，2018，pp.267-277

4　越谷市教育委員会，越谷市史通史編（下），1977，pp101-104